



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

和解の役務



御聖体(ユーカーリスタア)において、私たちの命は再びキリスト御自身の罪に対する完全な勝利に触れることができます。この罪とは魂の死であり、究極的には体の死の理由です。「キリストが死んでよみがえったのは、死んだ人々と生きていられる人々を支配するためである。(ローマ14・9参照) すなわち罪において、あるいは罪のために死んだ人々に、再び命を与えるためでした。

和解の役務は教会の生活と使命の根本的な部分をなしています。罪に対するキリストの勝利は教会や世界中の人々の生活にとってさまざまな形で現実となっており、そのどれをも軽んじるわけにはいかないのですが、キリストの贖いの御血の力が私たち一人ひとりの生活の中で最も効果的であらわすのは、赦しの秘跡においてであることを強調しておかなければなりません。



世界各地で赦しの秘跡が非常に疎かにされています。これはしばしば、宗教及び道徳上の良心の弱まり、罪の意識の消失、あるいは教会生活において赦しの秘跡の重要性が十分に指導されていないことなどにより生じます。時には私たちが、自らの愛と正義の不足や、和解させてくださる神の慈悲を真剣に考えないために、告解を怠る結果になりま

す。信仰の客観的な真理の重要性をしっかりと責任を持って受けとめることに対し、ためらいや気おくれを感じることもあります。そういうわけで、「キリストの命により、赦しは聴罪司祭が与える秘跡的赦しを通して個人個人に与えられ」ます。

「この秘跡の本質に関する教会の確信は変わらない」ことをあらためて強調しておかなければなりません。「和解と悔悛」No.30。この抄訳は「教皇様の声」八五年二月号に掲載。赦しの秘跡の実行を、聖職者が神の民のために行なう奉仕の中で、「最も重要なもの」とするために万全の策を講じるよう、兄弟である司教および司祭の皆さんにもう一度お願いします。キリストが、恵みを受けけるため御自ら私たちの手に与えられたこの方法に替わりうるものはありません。第二バチカン公会議では、赦しの秘跡をあまり実行しないように、とはどこにも表明していません。公會議が望んだことは、明らかに信者がもっと容易に秘跡のしるしを理解し、もっと熱心に、また(頻繁に)赦しの秘跡に与ることなのです。(「典章」No.59参照) 罪は個人の良心の深い所に触れるのですから、罪の赦しも教会が認めた特別な場合以外は、共同(一般)赦免ではなく個人的に行なわれなければなりません。カトリックの兄弟姉妹の皆さん、いかに正当ではあっても告解を単なる心理的解放の試みと見なすことなく、秘跡として、典礼行為としてとらえていただきたいのです。罪の告白は誠実さと勇気による行為です。罪を超えて愛と赦しに満ちた神の慈悲に自らを委ねる行為なのです。放蕩息子が父のもとに帰り、平和の接吻を受けるのと同様です。ですから「すべての告白場は、神と和解した個人が新たに汚れなく生まれる、特別に祝福された場所」(「和解と悔悛」No.31、V.III参照)であることは明らかです。

赦しの秘跡と、罪を赦す神の愛から遠ざかっている人々にお願ひします。この恩寵の源に立ち返ってください。恐れをもちたないでください。キリスト御自身があなたを待っています。キリストはあなたを癒し、あなたは神のもとに安らうことができるのです。

教会の若い人々全員に、赦しの秘跡においてキリストの赦しと力を得られるようお勧めします。(私は過ちを犯しました。神よ、私は罪を犯しました。神様、あなたの御怒りに触れるようなことを致しました。申し訳ありません。どうかお赦しください。もう一度努力します、御力を信じ、御身の愛を信じているからです)と言えらるる(勇氣のしるし)です。神の子の過ぎ越しの秘義、すなわち主イエズス・キリストの死と復活、その力が個人の弱さや世界中の人々のすべての罪にまさることを知っています。私は自らの罪を告白して癒され、そしてキリストの愛のうち生き延びてゆきます!

(一九八七・九・十三)

ペトロの鍵



愛する兄弟姉妹の皆さん。今日は聖ペトロの使徒座の祝日を祝います。この日は、教会が有する罪の赦しを与える義務を思い出させてくれます。

聖マテオの福音書は、神の民のためにペトロとその後継者たちが有する聖務の「約束」と呼ばれていることに触れています。イエズスは宣言なきに「私は言う、あなたは

(ペトロ)である。私はこの岩の上に私の教会を立てよう。地獄の門もこれには勝てぬ。私はあなたに天の国の鍵を与える。あなたが地上でつなぐものはみな天でもつながら、あなたが地上で解くものはみな天でも解かれる。

御存じのように、キリストはこの「約束」を復活の後に果たしになりました。そしてその時、キリストはペトロに、「私の小羊を牧せよ。私の羊を牧せよ」(ヨハネ21・15〜17参照)とお命じになりました。また、主イエスは驚くべき方法で「ペトロによって、ペトロの下に」(Ad Gentes 38「つないだり」解いたりする「権能」を他の使徒たちとその後継者、司教たちにお委ねになりました。(マテオ18・18参照)そしてこの権能は参与(分有)によってある程度まで司祭にも与えられます。

この「聖務」は広い分野にわたっています。たとえば、「真理の力(マテオ18・18参照)をもって(神の御言葉)を(保護し)(宣言する)義務、何よりもまず秘跡を祝うことを通して(聖化する)義務、種々様様な時代と環境の中でキリスト教共同体を、キリストへの忠誠の道に(導いて行く)義務などです。

司祭はキリストのペルソナにおいて赦す

今、私は罪を赦す義務を強調しなければなりません。赦しを得るには聖職者のもとへ自ら出頭しなければならないという義務には、かなりの困難をおぼえる信

者がいます。「なぜ、私とたいした違いのない人の心の奥底の状況を、一番秘密の罪さえも打ち明けなくてはならないのか」と彼らは反論します。さらには、「私の罪の赦しを得るために、人の仲介を経るかわりに、直接神に、あるいはキリストに話しかけることがどうして出来ないのか」と異議を唱えます。

このような問いや、これに似た質問は、もっともらしく聞こえます。なぜなら、赦しの秘跡は常にある程度の(努力)を要求するからです。けれどもこうした質問は、根本的に(教会の秘跡についての理解が欠けているか、あるいはそれを受け入れていない)ことを明らかにしています。

確かに、赦す人本人もまた赦しの秘跡にあずかる兄弟です。司祭は人を聖化するため努力を払っていても、彼自身は人間の弱さという限界をもっているからです。しかし、聴罪司祭(赦す人)は、知性とか心理的洞察とか、親切とか愛想の良さといった人間固有の資質の名によって罪の赦しを与えるのでも、司祭自らの聖性の名において罪の赦しを与えるのでもありません。司祭は、身も心も全くキリストに属する者であるところから湧き出てくる希望(ガラツィア20、①ペトロ3・15参照)をより一層喜び迎え入れ、伝達できるようにしたいと考えています。しかし、司祭(赦す人)は、手を挙げて祝福し赦しの言葉を唱える時、in persona Christi キリストのペルソナにおいてそうしているのです。キリストの単なる「代理」としてばかりでなく、

何よりもまず、一つの「道具」になっているのです。この道具を使って、死去し再び蘇り、私たちの救いのために生き、「私たちと共にいます主」イエズスが、神秘的な仕方ではあるが、現実(実際)に現存し、行動される、すなわち赦しをお与えになるのです。

すこぶる人間的な方法

次のように考えればいいのです。教会が間に入るの、一種イヤな気持ちがあるのは確かでしょうが、考えてみればこれは大変人間的な方法なのです。この方法のおかげで、私たちが罪から解放していただき

る神が、はるか彼方の抽象的な存在となったり、果ては私たち自身のはっきりしない腹立たしく絶望的な姿と重なるような事態が避けられるということ。教会の聖務者を通して、神御自身が私たちに「非常に近い」存在となってくださるのです。真に赦された心をもつ私たちのすぐ近くの存在となってくださるのです。こう考えてみると、教会の仲介は人が神に近づき、神の救いを得ようとする時、魂の中に秘められている大きな期待に応えるものであることがわかります。それならば教会の仲介は論争の的となるよりも、むしろ望むべきことではないでしょうか。こうして、赦しの秘跡の聖務者は、

キリストを知り キリストを愛しなさい

「二人の男が祈ろうと神殿に上った。一人はファリサイ人で一人は税吏だった。(ルカ18・10)けれども「義とされて」家に帰ったのは、ただ一人だけでした。それは他ならぬ税吏でありました。(ルカ18・14参照)

これは、神殿の内なる秘義、奉獻とかかわりのある秘義に税吏だけが到達したことを意味しています。二人とも祈ろうとして神殿に上ったにもかかわらず、清められたのは税吏だけでした。

従って、神殿、カテドラル、聖なる所は、もう一つの全く(内なる霊

です。けれども、このような和解の实体は——聖堂という外的しるしがそれを提示していますが——最後には人間の心、すなわち神によって義化され聖化された聖所を通らなければなりません。

ファリサイ人は「義とされず」に帰りました。彼は自分のことに心を奪われていて、その心の(空間)には神の余地がなかったのです。ファリサイ人は物理的には聖堂(神殿)にいましたが、彼の心の神殿に、神はいらっしゃいませんでした。

では、なぜ税吏は義とされて帰ったのでしょうか。理由は単純です。ファリサイ人は違つて、税吏は自分の罪を赦してもらわなければならないと謙遜に認めていたからです。彼は他の人々を咎めることはせず、自分自身を咎め

* 今月のおすすめ図書 *
罪と赦し(旧題罪と告解) 重版 九〇〇円 千二〇〇円
オプス・テイ創立者小伝 一八〇〇円 千三〇〇円

説教・講話・書簡等の抄記

税吏は「離れて立って」いました。が、恐らく自分では気づかずに主のおそばにいたのです。詩篇の言うように「主は心砕かれた者に近い」(詩篇33・19)、すなわち心から悔い改めている者、そして税吏のように「主よ、罪人の私を憐んでください」(ルカ18・13)と神の慈しみに信頼する者だからであります。

税吏は自慢せず、主を賞えます(詩篇33・2)。彼は自分を賞めはしません。自分を最上の席に据えず、神の尊厳、神の超越性を認めます。税吏は、神が偉大な慈しみに満ちた御者であり、貧しい者や賤しい者が呼びかけるとそれに応えてくださる(詩篇33・7参照)ことを知っています。

税吏は「はるかに離れて立って」いますが、同時に信頼しています。これこそ神の御前で正しい態度なのです。自分の罪ゆえに、己れを神の御前に立つにふさわしくない者と感じていますが、神が悔い改める罪人を愛されるので、神の御憐れみに信頼してお委せしているのです。

3 この詩篇をよく考えると、神を捜し求め、自分は神の下僕であること認めている人や、罪を悔いている人の心を顧慮する神の慈愛を見ることが出来ます。「主はそのしもべの命を解き放つ、主のがれる者はつぐないをしない」(詩篇33・23) 去る一月二十九日、聖コンスタン

ティヌスの祝日に当たって、皆さんの司教は、回心と聖体拝領と宣教の裏切りがあれば、愛する信徒の皆さん方がキリストを知り、キリストを愛するというすばらしい終着点に到る

ことが出来るだろうとおっしゃいました。

私も皆さんに、キリストに従い、主の教会を築き上げるため貢献するようお勧めします。あたかも神殿の石が祭壇を中心に互いに結合し、調和のとれた建物になっているように、御言葉と御聖体によって司教のまわりに集まった教会共同体の一員となり、腹藏なく生きることで、主に従い教会に貢献してください。

このような選択を支持し確認するためにまず第一に必要なのは、人間の心を被うベールを取り去り、贖われた人類の真の姿を表わす祈りを大切にすることであります。第二番目に必要なのは秘跡、特に赦しの秘跡と御聖体の秘跡にできるだけひんぱんに与えることです。なぜなら第一

のは回心と和解の秘跡、赦してください。慈悲に自己を委ねる行為(「和解と悔悛」Ⅲ参照「教皇様の声」八五年二月号に抄訳あり)だからであり、第二番目は、キリストに合体することの効果的なしるしであり、贖い主の御体と御血の御父に対して、賛美と交わり、とりなしと償いを、犠牲としてお捧げすることだからです。

秘跡はキリスト者の人格を完成させ、成熟させ、それによってキリスト者の人格は、神と隣人とに対する注意深く寛容な愛の中で自己の自由を行使するようにと導かれます。

4 「すなわち神は、キリストにおいてこの世と和睦し……和睦のことは私たちにゆだねられた」(コリント②5・19) 皆さん、今日、この厳かな典礼の集まりの機会にこの言葉を受け入

れてください。皆さんもまた、これを和解の言葉として受け入れましょう。イエズス・キリストにおいて、皆さんの町が神と和睦したしるしとして受け入れてください。

受け入れましょう。皆さん方全員は洗礼を通してキリストの死と復活に与り、無数の内なる聖所となられました。その内なる聖所によってこれを宣言してください。

高間において、キリストの復活された日が今日という日と一緒にになりました。(「八日間」の最終日である今日八日目に、キリストは再び高間に出現なさいましたが、今度はトマも皆と一緒にいました。

十二使徒の一人であるトマのエピソードは大変意義深いものです。彼の心の中で、死とは——キリストの死も——取り返しのつかない事実で告げる。ナザレトの出来事さえもイエズスがゴルゴダで息を引きとった途端、終わりを告げたのです。

トマはこのことを確信しきつていたので、他人の証言など受け入れられません。「私は信じない」(ヨハネ20・25)トマは「人にはできないことも神にはできる」(ルカ18・27)という

礼拝者が霊と真理をもって神を拝むように、(ヨハネ4・23、24参照)皆さんの心と良心との真理をもって、皆さんの熱心で誠実な祈りをこめて、仕事を証しとしてこのことを宣言してください。

主はそばにあって、皆さんを強めてくださいます。ちょうどパウロの場合のように、皆さんによって「宣教が全うされ、すべての異邦人にそれを聞かせ、……主に代々に栄光が

事実気づかなかつたのです。他の使徒は彼に「我々は主を見た」(ヨハネ20・20)と言ったにもかかわらず、頑固なトマは受け入れません。そればかりか彼は条件を出します。「私は見えない限り信じない、私は指を入れるまで信じない(前出)と。

不信のトマは幅広い象徴です。トマの中にあらゆる時代の人間の姿を見る思いがします。特に現代人の象徴と言えるでしょう。現代人にとっては、感覚で把握できるものだけが真実であり、経験できる事柄の範囲を越えた真理は存在しないからです。

そこで私たちは次のように問いかけることが出来るでしょう。キリストは明らかにこのような私たち人間を復活祭の出来事を中心、教会の創

時代を越えた人間の姿



あるように。(「ティモテオ②4・17」18) 主は皆さんのそばにおられます。善き戦いを戦ってください。最後の日信仰を保ってください。最後の日に正しい審判官たる主が、皆さんに正義の冠をお与えくださるでしょう。愛をもって主が現われる日待ち望む、皆さんとすべての人々とに。主に代々に栄光がありますように。アーメン。

設期に置いてみたいとお望みなのではないかと。トマはきっと他の「大勢のトマ」を高間に引き寄せることができるでしょう。

最後にもう一つ、それは私たち一人ひとりの中にトマ的なところがあるということ。トマはあらゆる時代の人間の姿を示しています。

だから、典礼が提示するあの「八日目」は大変重要な日なのです。今日こそ私たち一人ひとりが、経験による知識の対象であるこの世にも秘義の存在する余地があるということを確認する日なのです。

そう、秘義とは、見えるものや聞こえるもの、感知できるものの中、つまりこの世に見出すことができるものです。

不変の教え

信仰と教導職

皆さんと共に教会の生活における教理の重要性について考えたいと思います。第二バチカン公会議に引き続いて、カトリック信仰がいくつかの信心の業に限られず、行動、特に世界の正義と平和のための行ないに表われるべきだという意識が人々の間に新たに生じているのは喜ばしいことです。同時に、バチカン公会議も強調しているように、私たちは健全な教理という強い土台を築かなければなりません。この教理とは他でもない(イエズス・キリストの救いをもたらす真理)なのです。この真理は使徒信經にも含まれており、また教導職が教えるものです。この教理の土台がなくては私たちの全ての苦勞は無駄になります。パウロも述べているように、「すでに置かれてあるイエズス・キリスト以外のほかの土台を誰も置くことはできない」のです。(コリント①3・11) 教会が常に直面している問題は、私たちの知性と心を変えるこの真理についての知識と理解と愛を深めるということです。教会の普通の教導職が宣言する真理に従うことによつてのみ、私たちは世界の中で、世界のために使命を果たすことができます。

合うよう求められています。しかし神の御言葉の役に立つには、神の秘義のしもべである司祭、並びに愛の完成を通して教会を築き上げるために召される修道者の知的・靈的形成に特別の注意を払わなければなりません。訓練の過程はまず神学校や研修センターから始まり、一生を通しての個人的な勉学、教会全体との交わりにおいて行なわれる祈りや内省へと続いていきます。この形成は教理に根ざし、知性と心の両方に及ぶべきです。教会の教えを十分に教えるばかりでなく、それらの教えがいかに密接な相互関係を有するか、またどのようにして教会の仕組みと規律の基盤をなしているかを理解させねばなりません。神学校での教育の目的は、聖職を志す者が教導職の提示するカトリックの教えを深く理解し、彼らの将来の教えが真にカトリックのものとなり、教会の生活と信仰を正しく伝えることができるようにすることです。そうであつてこそ、信者は教会の一致と交わりへの深い愛、信仰の神秘についてのより明白な理解を聖職者と修道者の中に見出し、それを学ぶようになるのです。同様に重要なことですが、信徒、特に若い人たちに、洗礼によつて受け入れた信仰の真理を伝えなければなりません。人々が無関心、弱さ、

疎外のために教会から離れる時があることを私たちは知っています。若い時にカトリックの教えと秘跡の生活と祈りにおけるしつかりとした基礎を得ているならば、神の助けによつて全き信仰の実践へと立ち返りやすいことも経験が示しています。(…) カトリック教会における靈的刷新全体の内、きわめて重要なのは救しの秘跡です。使徒勸告「和解と悔悛」(『教皇様の声』八五年二月号参照)の中で述べたように、「すべての告解は特別で神聖な場であり、分裂は取り除かれ、和解を果たした個人、そして和解された世界が新しく汚れなく生まれるのです。(n・31V) 秘跡を行なう通常的手段としての個別の告白と赦免に関する教会の規則は、

単に従順の問題だけではなく、何よりも私たちの主イエズス・キリストの御旨に対する忠実の問題です。キリストの御旨は教会の教えを通して伝えられるからです。(n・31V参照) 多くのの人にとってイエズスの教えられた真理はなかなか受け入れられなかったと聖書に記されています。「神は御独生子を与え給うほどこの世を愛された」(ヨハネ3・16)の世を愛された(ヨハネ3・16)の世が、この世がその贖いの贈り物を受け取る事ができるのは、心を改めること——罪から立ち返ること——によつて、また見えないものを信じることによつてなのです。私たちキリスト者は、洗礼によつて新しい人間となつて生きていくわけですが、毎日の戦いを免除されるわけではあ

りません。御聖体、十字架、結婚、物質的な富、赦しについてのイエズスの御言葉を思い出すだけでも、イエズスがいかに私たちの信仰と徳とを強く試されているかがわかります。教会は、聖靈の導きのもと、現代人の信仰と徳のために全力を尽くして「いかなる時も」福音を説き続けます。十分な知識をもち自らの信仰に強い確信を抱き、同時に愛にあふれたキリスト者がいさえすれば、福音の教えは、まだ信仰を持たない人や信仰において迷っている人に信じてもらえるのです。たとえ真理が苦勞を蒙るものであり、多くのの人々の支持を得られないとしても、大きな愛があれば隠せず宣言することができます。(八八・四・十四) てしまふのです。それは消費主義、快樂主義の結果であり、人間の活動の目的を安易に入手できる利益におくものである。生命の唯一の神の掟に背く重大な犯罪として、人間が存在するための基本的な奪うことのできない権利を侵害するものとして墮胎を弾劾する時、教会は常に、はっきりと、強力に介入してきました。社会の基盤としてどうしても必要な倫理的価値を復活させなければならぬ、と教会は声を大にして訴え、介入を続けて行きます。この基盤なくしては、真の文明と社会生活は建設しえないからです。実際、文明は何よりもまず人間存在のあらゆる段階を通して、どの程度まで生命を尊重し、増進しているかによつて測られるものなのです。

生命を尊ぶ

皆さんの運動は、困っている母親や危機に陥っている家族に援助の手をさしのべています。ですから、健康管理施設や家族カウンセリング・センターが設けられ、そこでは生命が有効に尊重され、月足らずで消し去られることはありません。

胎児の生命を取り去ることは、悲しいかな世界中に、(…)昔からキリスト教の伝統をもつくにさえも広がっています。公共の基金から融資を受けて、浅薄で欠点だらけの墮胎賛成論に守られ、法律によつて墮胎が促進されている状態です。

と信頼が欠けているために、時には誤った福祉を願うがために、墮胎によつて人間の生命が犠牲にされています。危険にさらされた罪のない存在を守り、彼らの受けている抑圧を防ぎ、適正な方法で存在し、成長するよう保証する代わりに——それが使命なのですが——国々は死刑執行を認め協力さえしています。これは、理論的・実践的物質主義の行きつく最も困った結果の一つです。物質主義は、神を拒絶することにより、結局は本質的な卓越した次元における人間でさえ拒むことになっ

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要 替振郵便 神戸 3-72393